

メープルレター（67） 晩秋

霜月は時雨模様で始まりました。寒い冬が来る、寒い冬がもう来ると言っていた割には、暖かい晩秋が思ったよりも長続きし、紅葉もしっかり楽しめました。こんなこともあるのですね、嬉しい気分です。

マダム田中は先月半ばに外来診療だったのですが、案の定、待つこと4時間。何度、窓口にお問い合わせでも、「あーあの人は、待たせるのは常連だから」と返事が返るだけでした。やがて、窓口は閉まり、消灯し、看護婦たちは帰ってしまい、待合室には5人の患者が残されました。どうしたものか、どこが悪くて診療に来たのかななどと、5人で患者ミーティングが始まりましたが、それにしても埒が明かず、来ない番。マダム田中は、しびれを切らし、先回同様、ドアを一蹴りすると担当外科医の部屋に乗り込んでいきました。

「ドクター、お忙しいとは思いますが、診療はどうなっているのでしょうか。」

『マ、マダム、この通り5人もまだ患者が残っているのです。』

ドクターは机の上にずらーっと5人のカルテを並べてみせました。よほどマダム田中が怖かったのでしょうか。

「私は何番目ですか。」

「3、3番目です。」

「つまり、どのくらいまだ待つのでしょうか。」

「20分から30分です。」

「そうですか、では待っていますが、私のは診療は簡単なのです。」

「でも順番がありますから。」

そんな話しして5分後、

「マダム田中、診察室へどうぞ。」

他の4人のきつい眼差しの中、診察を受けること5分。

「膝は順調なようですし、肩の状況も悪くはありません。骨折から、まだ6か月しか経ってないので、何とも言えません。肩は、そのまま状況が変わらず、痛いようでしたら、コーチゾンで次回打ちましょう。では、3-4か月後にまたお出でください。係から日時を連絡させていただきます。」

たったこれだけ、この一言のために4時間待ったのでしょうか。次回は、来ないかも。。。そんな思いで病院を後にしました。

10月は、コロナ禍がやや収まったせいも、色々な行事があれやこれやと押し寄せてきました。先週末は、以前からの娘の提案通り、娘が一家でやってきて、孫を中心に写真撮影でした。カメラマンは、自然体の家族の風景を撮ることになっていて、ただ皆で遊んでいれば良い、それを適当に撮るから、そんな1日でした。孫娘は、骨折した脚も治って走り回っていました。環境が変わって嬉しいらしく、あちこちの引き出しを開けるのにも大忙しです。どの孫が来ても、必ず、虜になるのが、ちいさな引き出しがいっぱいある、ドリトル先生の貝のコレクションの家具です。インド洋の海で潜って熱帯魚をとりながら、拾い集めた大小の貝がはいっていて、開けると目の前にドーっと海の風景が広がるかのように、貝が並んでいます。それが終わると、他の戸棚のお手玉を取り出して遊び、それが終わるとピアノで遊ぶ、幼い子供にはびっくりすることばかりなのでしょう。きゃっきゃっと笑いながら半日ほど過ごし、お腹いっぱいご飯を食べると、満足そうに帰っていきました。その後、お昼寝を3時間もしたそうですから、よほど疲れていたのでしょう。それにしても子供のバイタリティーは凄いと、お相手に疲れ果てた老体をいたわりながら思うのでした。

主人が会長（名誉職ですが）を務めるお茶の裏千家の40周年記念行事茶会の出席もありました。今夜は眠れないだろうなあと思いながら、おいしいお薄を2-3度いただきました。ドリトル先生にはお茶は分かりませんが、日本の伝統文化を守ることはできそうなので、この役を引き受けることになりました。スピーチに一苦勞をしていましたが、それも無事に済み、美しい着物姿の女性たち（多少、年は食っておりますが）に囲まれ楽しそうでした。ドリトル先生には、日本的な感性がわかるようですし、文化への理解度も高いようなので、多少は役に立てそうです。

こうした中、長年の友人から話しを聞き、生きること、死ぬことを考えてもおりました。

「義妹や姪と最後の晩餐をこれからするのよ。」

といけばなの行事から帰る車の中で長年の友人がポツンと語るのです。

「最後の晩餐ってどういう意味？」

「義姉は2週間後に安楽死することになっているの。進行性の筋肉萎縮症（名前は何だかわかりません）で冬は越せないって医者に言われて、政府に安楽死希望を願い出たらしいわ。もうすぐ、何一つできなくなり、話すことも、物を飲み込むこともできなくなるらしい。今日は、義姉と一緒に姪の誕生祝いをするの。」

と、微笑みながら、この重いテーマを軽〜く話すのです。

2-3日後に

「どうだった？」

「不思議よね。美味しい料理を、笑いながら、食べ、写真を見ては思い出を語りあって。楽しい時間だったわ。でも。。。」

もう二度と会うことはないのよね。。と言いたかったのかもしれませんが。彼女は、筋ジストロフィーのご主人を25年間看病し、看取って10年たちます。そんな明るい友人も、ずっと以前、ある日のこと、車の中で、ハラハラと涙を流していたことがありました。

「私の人生って行き止まりなのよね。一人では食べることもトイレに行くこともできない夫の世話でこのまま月日だけが過ぎていくようで。だからって捨てられないし。」

涙はとめどがなかったのです。何と言ったらいいのか。。

「あなた、マッチングアプリでパートナーを探して、愛人持てば。」

「えっつ！！」

「ぎゅうーっと腕の中に抱きしめてくれる人がいれば、慰められるんじゃない。何一つ暮らしを変えず、ただ自分の時間を持つ。誰か待っていてくれる人がいる。。それでいいんじゃない。」

彼女は、この隠された時間で何とか切り抜けていきました。

「夫のお葬式の花を活けてくれない？」

そんな電話がある日彼女からかかってきました。心臓麻痺を夜中に起こしたご主人は、
救急車を呼ぼうとする友人の手を抑えると、

「しばらく君とこうしているから。これでいいんだ。これを待っていたんだ。もう十分だよ。」こうして旅立っていったのでした。

生きるのも死ぬのも難しい、そんなことを考えさせられた晩秋でした。